

無欲の初優勝！

60歳から競技ゴルフ

元小学校長が満面の笑み

通算2オーバー、146

前田 弘（チェリー字土）



元校長先生は強かった。6年前の60歳の定年退職を機に本格的に競技ゴルフを始めた前田弘（チェリー宇土）が2位以下に4打差をつける圧勝劇で初の九州チャンピオンの座についた。「実感が湧きません。初日が終わった後、『ほかの人のスコアは気にせず、自分のゴルフをやろう』と。結果として優勝となり、栄えある賞をいただくことになりました」と前田は淡々と語った。

初日、イーブンパーで青木とともに首位スタート。2番で3パットのボギーでスコアを1つ落とすが、5番で5メートルのバーディーパットを沈める。続く6番で寄せきれずにボギー。「ミラクル。あれが大きかった」と前田自身もびっくりのバーディーパットは9番の8メートルだ。「3メートルは切れそうな」スライスラインを見事に読んだ。インに入って12番ショートでボギー。最終18番ロングも結果としてボギーを叩くのだが、ティーショットは7番アイアン。というのも、その前の17番ミドルでドライバーの第1打が左の木に当たって、フェアウエーに戻る幸運に恵まれた。このコースは17番と18番の間に大きな池が横たわっている。難を逃れた前田は18番のティーグラウンドで「池は気持ち悪い。ボギーはいいが、ダボやトリプルは打ちたくない」とマネージメントして得意とする7番アイアンを手にしたのだった。

熊本市内の出身で済々黌高から熊本大教育学部を卒業して小学校の先生に。初任地は天草で11年間、教鞭を取った。当時の校長からゴルフを薦められ、29歳の時に初めてクラブを握る。以来、土日などに仲間とコースを回ったりしていたが、60歳の定年を機に競技ゴルフへの挑戦を決める。「家族会議を開いたんです。みんな『応援する』と言ってくれて」。前田の両親、そして夫人の3人は快くOKサインを出した。

それからは本格的にゴルフに没頭することになる。週5日は練習場に足を運び、毎日2時間から5時間は練習したり、ゴルフの話をしたり。とにかくゴルフ漬けの日々を送っている。アプローチの練習だけでも多い時は1日400球。20ヤード、40ヤード、70ヤードなどと書いてある看板を目掛けて真剣にボールを打つ。たゆまぬ努力の成果が九州一につながった。本格的な競技は60歳からと言っても、それ以前のベストスコアは「70」というから、ゴルフの素養は持っていたのだろう。

練習場ばかりでなく、コースへも熱心に通う。昨年のラウンド数は150。ただ、回るだけでなく、自分のスタッツをきちんとまとめている。例えば、昨年のフェアウエーキープ率は68%、パーオン率は44%、1ラウンドの平均パット数は29.8というふうに。前田自身が自分のゴルフを分析すると、「フェアウエーキープ率の割にパーオン率が悪いのはアイアンが良くないから」となる。今後は「アイアンの精度を上げる」というのが課題だ。

今年は新型コロナウイルス感染症拡大の影響のため、日本ミッドシニア選手権は中止となり、前田の「ジャパンに出る」目標は叶わなかった。全国の舞台を目指した前田の新たなチャレンジが始まる。



■ 2位タイ選手の一言

佐藤憲一（大分）「ショットは完璧だったが、パターがねえ。風には強いし、もっと天候が悪くなれば良かったんだが。雨が降ると思ったけど」

青木英樹（佐賀ロイヤル）「悔しいなあ。『焦らず、自分を信じろ。強いやつはお前しかおらん』という助言を受け、そのつもりでやったけど、体が動かんかった。ふわっとしていた」

吉野武司（肥後サンバレー）「9番の（第1打の）左OBがねえ。後半はあんまりドライバーを使わなかった。九州大会では初めての最終組だった」



大会が開催された、あつまるレークカントリークラブ





